

# 齋藤竹堂撰『鍼盲録』訳註稿(七)

堀 口 育 男

## 要 旨

『鍼盲録』は、江戸時代末期の儒学者齋藤竹堂が、天保十年八月から九月にかけて、江戸から常総房を旅した時の漢文遊記である。本連載「齋藤竹堂撰『鍼盲録』訳註稿」では、『鍼盲録』本文の翻刻、訓讀、語釈、訳註を行なつてゐるが、今回は、八月廿九日、土浦から船に乗つて霞ヶ浦に及び、牛堀に至つて夜泊した部分を對象とした。併せて附詩三首の訳註を行なつた。

## 八、八月廿九日

念九、晨晴、意已在湖上、遽辭登舟、篙師不來、下午、始解纜於櫻川橋下、漸進、兩岸愈豁、浦澈歷落相屬、所謂九十九灣、叢翠競秀、令人應接不暇、回視筑波、遠黛如顰、殆作惜別狀、湖大數里、古稱波逆海、是日無風、晴波激灑、如行圖畫中、薄暮雨至、掩篷而臥、舟外蘆荻掩映、雨聲蕭瑟、時推篷窺之、水靄空濛、漁燈數點、極有幽致、泊牛堀、

## 〔訓讀〕

念九。晨晴。意は已に湖上に在り。遽かに辭して舟に登りしに、篙師來らず。下午、始めて纜を桜川橋下に解く。漸く進めば兩岸愈々豁し。浦澈歷落として相屬なる。所謂九十九灣なり。叢翠秀を競ひ、人をして応接に暇あらざらしむ。筑波を回視すれば、遠黛顰むるが如く、殆ど惜別の状を作す。湖の大なること數里。古へには波逆の海と稱せり。是の日、風無く、晴波激灑として凶画の中を行くが如し。薄暮、雨至る。篷を掩ひて臥す。舟外には蘆荻掩映し、雨聲蕭瑟たり。時に篷を推して之れを窺へば、水靄空濛として、漁燈數點、極めて幽致有り。牛堀に泊す。

## 〔語釈〕

- 念九 廿九日。
- 晨晴 朝より晴れること。わざぐ「晨」と言つたのは、この日の夕方より雨になる為か。一般には、夜来の雨が上つたやうな場合に言ふものと思はれるが、特にそれを示す記述は無い。
- 意 心。氣持。
- 已 すでに。もはや。
- 湖上 みづうみの上。湖水の水面。また、みづうみのほとり。湖畔。

こゝでは前者。唐、盧綸「送吉中孚校書帰楚州旧山詩」に「並  
 轍湖上遊、連橋月中泊。」とある。湖は、霞ヶ浦。「意已在湖上」とは、  
 身体はまだ藤森弘庵（淳風）の家に在りながら、心は早くも霞ヶ浦  
 に飛んでゐる、との意。気が逸つて、心こゝに在らず、といふ状態。  
 霞ヶ浦の風光に対する期待の大きさを示す。

○遽 にはかに。慌しく。

○辭 泊めてもらつた藤森弘庵の家を辞去する。八月廿四日の条、  
 「藤森淳風」の語釈に引いた弘庵の「贈齋藤子徳詩」は、或はこ  
 の時に贈つたものであつたかも知れない。

○登舟 舟に乗る。乗船。唐、孟浩然「陪張丞相自松滋江東泊  
 渚宮詩」に「放溜下松滋、登舟命楫師。」とあり、同、李白  
 「夜泊牛渚懷古詩」に「登舟望秋月、空憶謝將軍。」とある。

○篙師 船頭。水夫。篙工。篙は、さを。舟をさし進めるさを。唐、  
 杜甫「水会渡詩」に「篙師暗理楫、歌笑輕波瀾。」とあり、同、同「早  
 發詩」には「早行篙師急、席挂風不正。」とあり、同、殷堯藩「襄  
 口阻風詩」には「篙師整纜候、明發、仍謁荒祠問鬼神。」とある。

○下午 午後。上午（午前）の對。『水滸傳』第廿四回に「三人又  
 喫幾杯酒、已是下午的時分。」（『漢語』）とある。

○始 はじめて。やつと。

○解纜 舟のともづなを解く。舟を漕ぎ出す。纜は、ともづな。舟  
 をつなぐ綱。唐、虞世南「奉和出穎至淮応令詩」に「良晨喜  
 利涉、解纜入淮潯。」とあり、同、韓愈「晚泊江口詩」に「郡  
 城朝解纜、江岸暮依村。」とある。

○櫻川橋 土浦城下、中城と本町の間（現在の土浦市中央一丁目と

二丁目の間）、水戸街道が旧櫻川（川口川）と交叉する地點に架け  
 られてゐた橋。櫻橋とも言ふ。慶長十八年、幕府直宮の普請により、  
 錢龜橋、簀子橋と共に架けられたもので、土浦三橋と称せられた。  
 橋の袂（本町側）には、高札場があつた。橋の下を流れる旧櫻川は、  
 屈曲しつゝ、十町程で霞ヶ浦に注ぐ。両岸には船宿が立ち並び、河  
 口には、享保十二年、藩の援助で築立てた川口河岸があり、高瀬舟  
 の出入りで賑はつてゐた。当時の土浦は、牛堀、小堀、関宿、松戸  
 を経て江戸に至る、霞ヶ浦、利根川、江戸川水系の水運の起點とし  
 ても繁榮してゐた。牛堀まで、水程九里。江戸までは五十二里。櫻  
 川橋は、明治三十四年、煉瓦造りの眼鏡橋となつたが、昭和になつ  
 てから旧櫻川が暗渠となり、上が道路となつた為、橋も交叉點の下  
 に姿を隠し、俗に「橋も無いのに櫻橋」と言はれるやうになつた。  
 現在、土浦町道路元標と並んで「櫻橋」と刻した石柱が立つのと、  
 「櫻橋」といふ、ばす停留所名に僅かに名残りを留める。なほ、現在、  
 土浦市富士崎一丁目と桜町一丁目との間の桜川に架る橋に桜川橋が  
 あるが、これは全くの別の橋である。『土浦市史』、永山正『土浦の  
 歴史』（昭和五十七年四月 東洋書院）、同『土浦町内誌』（平成元  
 年三月 土浦市教育委員会）、本堂清『土浦町内ものがたり』（平成  
 元年十二月 常陽新聞社）等参照。

○漸 やうやく。次第に。

○愈 いやよく。益々。

○豁 広い。開ける。広々とする。土地、景色などが開ける。東晋、  
 郭璞「江賦」に「徹如地裂、豁若天開。」とある。

○浦激 うら。川や海、湖などのほとりの地。激も浦に同じく、う

ら、の意。唐、王維「三月三日曲江侍宴应制詩」に「画旗揺浦激、春服満汀洲。」とあり、同、孟浩然「夜泊牛渚趁薛八船不及詩」に「浦激嘗同宿、煙波忽問之。」とあり、同、杜甫「戲題画山水図歌」に「中有雲氣随飛龍、舟人漁子入浦激。」とある。

○歴落 入り混つて並ぶさま。交錯したさま。錯落。晋、王羲之「答許掾詩」に「済冷澗下瀨、歴落松竹林。」とあり、唐、張九齡「九月九日登龍山詩」に「清明風日好、歴落江山望。」とある。

○相屬 互ひに連なる。屬は、連なる。続く。八月廿七日の条に「間絶不屬」とあつた。

○九十九灣 数多くの入江。九十九は、多数をいふ。霞ヶ浦の入江に就て、九十九灣と称した例として、藤森弘庵「霞浦夜扁詩」(『春雨樓詩鈔』卷八)に「前村犬吠夜冷冷、九十九灣風露青。」といふものがある。

なほ、近世には、霞ヶ浦沿岸の漁村(津)の自治的聯合組織として、霞ヶ浦四十八津と呼ばれるものが存在したことが知られてゐる。北浦には、同様の存在として、北浦四十四ヶ津があつた。網野善彦「霞ヶ浦・北浦」(『網野善彦著作集』第十卷(平成十九年七月 岩波書店))参照。九十九灣の称は、或はこれと関はるか。

○叢翠 むらがるみどり。樹木などのみどり色のむらがり。唐、白居易「池上作」に「叢翠萬竿湘岸色、空碧一泊松江心。」とある。

○競秀 美しさを競ふ。唐、柳宗元「植靈寿木詩」に「叢萼中競秀、分房外舒英。」とあり、同、劉禹錫「九華山歌引」に「九峰競秀、神采奇異。」とある。

○應接不暇 対象が多過ぎて、一々応待してゐる暇が無い。美しい

景觀などが次々と現れ、一々心を留めて賞美してゐる暇が無い、といふ時の慣用的表現。『世説新語』言語に「王子敬(獻之)云、從山陰道上行、山川自相映發、使人應接不暇。」とあるのに由る。

○回視 ふりかへりみる。北宋、黃庭堅「題顔魯公帖文」に「觀魯公此帖、奇偉秀拔、奄有魏晉隋唐以來風流氣骨、回視歐虞褚薛徐沈輩、皆為法度所窘。」(『大漢和』)とある。

○遠黛 遠くの山(こゝでは筑波山)が黛色に見えるのを言ふ。黛は、眉墨。眉を描く墨。黛色は、濃い青色。青黒色。遠くの山の黛の色に喩へて表現するのは、唐、王維「華嶽詩」に「連天凝黛色、百里遙青冥。」とあり、同、高適「同薛司直諸公秋霽曲江俯見南山作詩」に「廻首見黛色、眇然波上秋。」とあり、同、皇甫冉「曾(一作魯)山送別詩」に「南望千山如黛色、愁君客路在其中。」とあるなど、多くの用例があり、常套化した表現。黛からは、当然、美しい女性が連想せられる。

○顰 ひそめる。しかめる。眉をひそめる。顔をしかめる。『莊子』天運に「西施病心而顰」(顰は顰に同じ。)とあることから、春秋、越の西施が、古来、眉を顰める美女の典型となつてゐるのは、周知の通りであり、こゝも、眉を顰める理由は違つてゐるが、当然、筑波山の姿に西施の面影を重ね合はせてゐるものと解すべきであらう。そして、こゝでの西施への連想が、後文の展開の伏線となつてゐることは、後述する。

なほ、唐、李羣玉「黃陵廟詩」には「猶似含顰望巡狩、九疑如黛隔湘川。」(顰は顰に同じ。)とあり、黛色の山(九疑山)が眉を顰めてゐるかのやうだ、とする点、本作品と共通性が高い。これ

は、南方巡狩中に崩じた帝舜の後を追つて湘江に身を投げたといふ娥皇、女英二妃の悲哀を詠じたものである。

○殆 ほとんど。云々に近い。云々に似てゐる。

○作 なす。

○惜別 別れを惜しむ。別れの名残りを惜しむ。唐、杜甫「魏十四侍御就敝廬相別詩」に「遠尋留葉価、惜別到文場。」とある。

○状 様子。かたち。すがた。ありさま。状態。

○湖大數里 霞ヶ浦の大きさに就て、『地名辞書』には「面積十方里許、」とある。湖の西北端の土浦から東南端の牛堀まで、直線距離では約三十軒ある。従つて、こゝで言ふ「里」は唐土の里程によるものではなく、当時、わが国通行の里程（三十六町を一里とする）によるものと思はれる。

○波逆海 なさかのうみ。『萬葉集』卷第十四、相聞、常陸国歌に、

比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許會 比氣波多延須礼

阿都可多延世武

とあり、仙覺『萬葉集註釈』に「ヒタチノクニ、ナサカノウミトイフハ、イツクニアルソト、トシコロアマタノ人ニタツヌレトモ、スヘテシリタル人ナシ。名ヲタニモキカストナム申ス。サレハチカラヲヨハヌニヨリテ、コレヲ案スルニ、常陸ノカシマノサキト下總ノウナカミトノアハヒヨリ、トラクイリタル海アリ。スエハフタナカレナリ。風土記ニハ、コレヲ流海トカケリ。イマノ人ハ、ウチノウミトナン申ス。ソノウミヒトナカレハ、北鹿島郡ト、南行方郡トノナカニイレリ。ヒトナカレハ、北行方郡ト、下總國ノサカヒヲヘテ、信太郡、茨城郡マテニイレリ。シカルニ、カノウチノウミ、シホノ

ミツトキニハ、ナミコトニサカノホル。シカレハ、ナミノサカノホル義ニヨリテ、ナサカノウミトイフヘキナリケリ。ナミヲ、海人ナトイフコト、前二尺スルカコトシ。カノフタナカレノ入海、タマモヲホクヲヒナヒケリ。」とある。『古今類聚常陸國誌』上巻、山川には、「波逆海」として「萬葉集倭訓奈賀乃宇瀨、今不知其所、或人曰、（仙覺萬葉抄出）波逆海、世失其所、疑是今内海也、内海即風土記所謂流海也、首在下總國海上郡、與本國鹿島郡界、有兩大尾、相分、一尾在鹿島行方兩郡間（即今高天浦）一尾在下總國地、與行方郡相望、延入信太茨城郡地、（即今香澄浦）土人名曰内海、是海也、潮盈則波逆上、縮則須下海濱、方言謂波爲内海、不可疑歟、」とあり、『新編常陸國誌』卷六には、「波逆海 奈左可乃宇美」として「本國ノ鹿島、行方ト、下總ノ海上、香取ノサシ向ヘル間ナル、兩國ノ界ノ内海ノ名ナリ、萬葉集ノ国歌ノ中ニ、常陸ナル、ナサカノ海ノ、玉藻コソ、ヒケバ絶レ、何ドカ絶エセム、トヨメルハコレナリ、仙覺萬葉抄云、（○中略）實ニコノ抄ニ云シ如ク、近キ比マデモ、其名ヲ知ルモノナカリシガ、小宅生順國誌ヲ撰セシ時、初メテ仙覺ノ説ニヨリテ、定メテコノ邊ノ名トセシヨリ、近來ハ好事ノ者多カレバ、サラヌ者マデモ、コノ邊ヲ波逆ト云事トナレリ、仙覺ノ説尤其所ヲ得タレバナリ、但潮ノ滿ル時、波殊ニ逆流スルニ依テ、名トセシト云ヘルハ、是ニアラズ、是海ハ鹿島香取ノ間三里ト云テ、其廣大ナレバ、風ノアタリモコトニ強ク、波ノ逆立テ、水上ノ方ヘ反ルサマ常ニヨク見ユルナリ、コレ波逆ノ名ヲ得ル所似ナリ、サバカリ廣カラヌ川ニテハ、兩岸近ケレバ、風モ強クアタルコトナシ、サレバ波ノ立コトモ希ナリ、」

とある。小宅生順は水戸藩の儒官で、寛文中、第二代藩主徳川光圀の命により、常陸国の地誌を編纂した。延宝二年歿。『古今類聚常陸誌』は、生順編纂の地誌を増補したものと見られる。『茨城県史料』近世地誌篇（昭和四十三年三月 茨城県「解説」参照。扱、以上によれば、『萬葉集』に見える「奈左可能宇美」は、鎌倉期にはすでに何処か分からなくなつてゐたのを、仙覚が「波逆の海」として考証、比定し、これに基づいて、近世になつてから、常陸の鹿島、行方と下総の海上、香取の間の水域の呼称として、復活、定着した、といふことになる。近世以降の波逆浦は、霞ヶ浦とは別の水域であり、また、霞ヶ浦の古称が波逆海であつたといふことに就ても、必ずしも明証が有るわけではないやうである。なほ、近世以降の波逆浦には、内波逆浦と外波逆浦とが有つたが、内波逆浦は昭和十六年から四十九年までの間に干拓せられて消滅し、現在、潮来市と神栖市の間を外波逆浦が残る。

○晴波 晴れた日の波。唐、陸龜蒙「和襲美重玄寺雙矮檜」詩に「更憶早秋登北固、海門蒼翠出晴波」とある。

○激瀾 小波の連なり動くさま。水の盈ちあふれるさま。波が日に映じてきらめくさま。南朝 梁、何遜「范僕射故宅詩」に「激瀾故池水、蒼茫落日暉。」とあり、唐、杜牧「題齊安城樓」詩に「鳴軋江樓角一聲、微陽激瀾落寒汀。」とある。

「晴波激瀾」から「雨至」、そして「水靄空濛」といふ表現の展開は、北宋、蘇軾「飲湖上初晴後雨二首詩」其二に

水光激瀾晴方好 山色空濛雨亦奇

欲把西湖比西子 淡粧濃抹總相宜

齋藤竹堂撰『鍼旨録』訳注稿（七）

とあるのを下敷にしてゐる。西湖は杭州の西にある湖で、古来、景勝地として知られる。西子は西施のこと。蘇軾のこの詩を介して、前に「遠黛如顰」と言つたのと、この後の行文とが繋がり、自ら霞ヶ浦の湖上に古代越の美人の面影が濃密に漂ふ、といつた趣になつてゐる。なほ、この後、九月三日に訪れる鹿島神宮では、芭蕉の句意を自らの詩の中に詠み込んでをり、さうしたことからすれば、或は『奥の細道』の「象潟や雨に西施が合歡の花」の句が、竹堂の念頭にあつた可能性もあらう。

○圖畫 絵画。

○薄暮 日暮れに近づく。薄は、迫る。また、単に、日暮。夕暮。黄昏。唐、王維「過香積寺」詩に「薄暮空潭曲 安禪制毒龍。」とあり、北宋、范仲淹「岳陽樓記」に「薄暮冥冥、虎嘯猿啼。」とある。

○雨至 雨が降り出した。

○掩篷 舟の窓などを、とまでおほふ。篷は、とま。竹などで編み、舟の戸口や窓のおほひとするもの。

○臥 横になる。

○蘆荻 あしとをぎ。古樂府「烏夜啼八曲」に「巴陵三江口、蘆荻齊如麻。」とあり、唐、岑參「楚夕旅泊古興」詩に「秋風冷蕭瑟、蘆荻花紛紛。」とあり、同、白居易「浦中夜泊詩」に「回看深浦停舟處、蘆荻花中一點燈。」とある。

○掩映 おほひ隠す。映は、隠す。また、おほひ隠したり頭はしたりする。こゝは、前者であらう。唐、劉長卿「春望寄王洛陽」詩に「依微水戍聞鉦鼓、掩映沙村見酒旗。」とあり、同、白居易「夜泛陽塢入明月灣」詩に「掩映橋林千點火、泓澄

潭水一盆油。」とあり、同、杜牧「朱坡絶句三首」其二に「藤岸竹州相掩映、满地春雨鷺鷥飛。」とあり、同、李郢「江亭春霽詩」に「春風掩映千門柳、曉色淒涼萬井煙。」とある。

○雨聲 雨の音。唐、白居易「百花亭晚望夜歸詩」に「日色悠揚映山尽、雨声蕭颯渡江來。」とある。

○蕭瑟 秋風などのものさびしい音。また、ものさびしいさま。戦国、楚、宋玉「九辯」に「悲哉秋之為氣也、蕭瑟兮草木搖落而變衰。」とあり、晋、張協「七命」に「其居也崢嶸幽藹、蕭瑟虛玄。」とあり、唐、張説「幽州夜飲詩」に「涼風吹夜雨、蕭瑟動寒林。」とあり、同、皎然「雨詩」に「霏微過麥隴、蕭瑟傍沙城。」とある。こゝは、雨音のものさびしいさま。

○時 時に。時折。

○推 おす。おしひらく。

○窺 舟の窓から、外の様子をのぞいて見る、といふこと。

○水靄 水面に生ずるもや。靄は、もや。

○空濛 小雨や靄などで、薄暗いさま。ぼんやりと暗いさま。南朝、

齊、謝朓「觀朝雨詩」に「空濛如薄霧、散漫似輕埃。」とあり、唐、武元衡「題嘉陵驛詩」に「悠悠風旆繞山川、山馭空濛雨似煙。」とある。こゝが蘇軾の詩を下敷にしたものであることは、前述した。

○漁燈 漁舟の燈火。漁火。いさり火。唐、張抃「題衡陽泗州寺詩」に「未<sub>レ</sub>知今夜依何処、一點漁燈出葦叢。」とあり、同、李九齡「荆

溪夜泊詩」に「點點漁燈照浪清、水煙疏碧月朧明。」とある。

○數點 幾つか。點は、漁燈を数へる単位。

○極有幽致 幽致は、奥深く静かな趣。幽趣。この表現は、八月廿

四日の条、牛久湖に泛んだ箇処に既出。

○泊 碇泊する。舟がよりする。また、碇泊した舟の中に宿る。この日、竹堂が舟がよりした舟の中に宿つたことは、附詩からも知られる。

○牛堀 行方郡牛堀村。現在の潮來市牛堀。『地名辞書』常陸(茨城)行方郡、牛堀に「今永山、堀之内、茂木、清水等を合せ、香澄村と云ふ。麻生の東南一里、霞浦の水駅にして、鹿島、佐原、銚子等への航路は、此より分派す。佐原へ二里、鹿島へ三里、銚子へ十里。」とある。『新編常陸國誌』巻五には、「牛堀、宇志煩利」として、「往時永山村ヨリ分レテ一村トナレリト云フ、東ハ島崎、上戸二村、北ハ永山、堀之内二村ニ接シ、西ハ霞浦ニ臨ミ、南ハ境川ヲ限ル、其幅員東西七町、南北六町ニ亘リテ、上町、上仲町、東、宿、川岸等ノ小名ヲ有ス、此地ハ霞浦ノ入口ナリ、霞浦ハ至テ渡リ難キ海ナレバ、此所ニ滯船シテ、風ヲマツ故ニ、出入ノ船多ク此河岸ニ集ルナリ、元禄十五年ノ石高二百三十五石八斗八升四合〔地理志云、戸数凡九十七〕、」とある。

#### 〔試訳〕

廿九日。朝からの晴天である。気持ちはずでに霞ヶ浦の湖上に飛んでゐる。淳風(弘庵)への暇乞ひもそこく、に舟に乗り込んだ。ところが、肝腎の船頭が現れず、午後になつてから、やつと櫻川橋の下から舟を出した。次第々々に進んで行くにつれ、兩岸は益々広々と開けて来た。浦々(湖岸の漁村)は、散らばりつゝ、互ひに連なつてゐる。これが世に言ふ「九十九湾」である。数多くの樹木の緑

色の群がりが美しさを競ひ合ふやうにしてをり、その一々に就て、美しさを味はつてゐる暇もない。筑波山を振り返つて見ると、遠くに見える黛色の山の姿は、美人が眉を擡めてゐる風情で、恰かも私のために、別れを惜しんでゐるかのやうに見える。霞ヶ浦の大きさは数里あり、古くは波逆の海と呼ばれてゐた。この日は風が無く、晴天の下、波が日の光にきらめき、まるで絵に描いた景色の中を進んで行くかのやうである。夕暮れになつて、雨が降り出した。篷で窓を掩つて、舟の中に横たはる。湖面には、蘆や荻が生ひ茂つて、視界を蔽ひ障つてをり、雨の音がもの寂しく聞こえる。時折、窓の篷を推して、舟の外の様子を窺ふと、水面には霧が立ちこめて、ぼんやりと薄暗く、漁火がぼつり／＼と、その中に浮かんでゐた。大變、奥深く静かな趣きが感ぜられた。牛堀に夜泊した。

附詩

霞浦舟中三首

①十里水光湛不波。旋移艇子等閑過。平生此快應無比。停棹湖心看筑坡。

②十年夢隔釣魚潭。滿肚塵埃不自堪。要向煙波洗將去。孤篷聽雨泊湖南。

短篷聽雨也何妨。翻覺閑眠一味長。泊處不知何地是。汀蘆潭荻夜茫茫。

①枕山曰、霞浦看筑波、亦如三穗海看富嶽、爲快觀、爲奇觀、豈有比哉、

②良齋曰、淡而有味、

〔訓読〕

霞浦舟中三首

十里の水光 湛へて波だゞず  
艇子を旋移して 等閑に過ぐ  
平生 此の快 応に比無かるべし  
棹を湖心に停めて 筑坡を看る

十年 夢は隔つ 釣魚の潭

滿肚の塵埃 自ら堪へず

煙波に向ひて洗ひ將て去らんことを要す

孤篷 雨を聴いて 湖南に泊す

短篷 雨を聴くも 也た何ぞ妨げん

翻て覚ゆ 閑眠 一味長きを

泊処 知らず 何れの地か是れなる

汀蘆 潭荻 夜茫茫

〔眉批〕

①枕山曰はく、霞浦にて筑波を看るも、亦た三穗の海にて富嶽を看るが如し。快観たり。奇観たり。豈に比有らんや、と。

②良齋曰はく、淡にして味有り、と。

〔語釈〕

○十里 唐、高適「別董大詩」に「十（一作千）里黃雲白日曛、

北風吹雁雪紛紛。」とある。こゝは、あたり一面、乃至、見渡す限り、といふ程の意に解すればよいであろう。

○水光 水のひかり。水面にきらめく光。八月廿八日の条に既出。蘇軾「飲湖上初晴後雨詩」(前引)にも「水光瀲灩晴方好。」とあつた。

○湛 湛は多音多義の字であるが、こゝでは意味からして(一)澄む。清い。(去声陷韻)(二)たゝへる。あふれる。(平声覃韻)(三)深い。(平声侵韻)(四)たゝへる。あふれる。(上声賺韻)などが考へられる。但し、第四字「光」を孤平にしないためには、こゝを平字にする必要がある。すると(二)又は(三)が適當といふことになる。今(二)の意に解する。唐、高適「同薛司直諸公秋霽曲江俯見南山作詩」に「南山鬱初霽、曲江湛不流。」とある。また、北宋、蘇軾「以雙刀遺子由詩次其韻詩」に「湛然如古井、終歲不復瀾。」とある。

○不波 波立たない。唐、趙居貞「雲門山投龍詩」に「大壑靜不波、渺溟無際極。」とあり、同、羊士諤「寄黔府寶中丞詩」に「夏月天無暑、秋風水不波。」とある。

○旋移 『詩家推敲』に「旋ハ逐旋也ト訓ス、」とし、「旋ノ字多ク尋ノ如クニ用ユ、(○中略)ミナツ、ヒテ追付ノ意ナリ、平聲去聲トモニ用ユ」とある。旋には、また、すみやかに、たちまち、の意もある。また、旋を、めぐる、めぐらす、の意の動詞として、旋移で、めぐらし移す、の意にも解せられる。唐、王周「兵州衆湖阻風二首」其二に「偶繫扁舟枕綠莎、旋移深处避驚波。」とあるのが本作品に近い用例であり、これに由れば、旋移をめぐらし移す、の意に解するのがよいか、と思はれる。但し、唐、鄭谷「叙

事感恩上狄右丞詩」に「寇難旋移、國、漂離幾聽蛩。」とあり、同、皮日休、陸龜蒙「獨在開元寺避暑頗懷魯望因飛筆聯句」に「任誕襟全散、臨幽榻旋移。」(陸龜蒙)とあるのなどは、對仗からしても、旋を助辭として用ゐてみると見られる。聊か判断に迷ふが、暫く、旋移を動詞として、めぐらし移す、の意に解して置く。

○艇子 こぶね。小さな舟。また、船夫。こゝでは、前者。唐、皮日休「太湖詩 孤園寺」に「艇子小且兀、綠湖蕩白芷。」とあり、同、同「胥口即事六言二首詩」其二に「換酒帽頭把看、載蓮艇子撐歸。」とあり、同、蔣吉「石城詩」に「江人橈艇子、將謂莫愁來。」とある。

○等閑過 一般には、なほざりに過ぎる、うか／＼としてゐる間に過ぎてしまふ、の意。唐、元稹「遣病十首詩」其五に「壯年等閑過、過壯年已五。」とある。(等閑は等閑に同じ。)こゝは、ぼんやりしてゐる間に過ぎる、それと気づかないうちに通り過ぎる、との意か。

○平生 平素。普段。日頃。唐、孟浩然「送朱大入秦詩」に「分手脫相贈、平生一片心。」とあり、同、黃滔「遊東林寺詩」に「平生愛山水、下馬虎溪時。」とある。

○應 『詩家推敲』に「應ハ當也、又料り度ル之辭、」とある。

○無比 くらべものがない。たぐひがない。『後漢書』馬援傳に「經學博覽、政事文辯、前世無比。」とあり、唐、羅隱「投宣武鄭尚書二十韻詩」に「人地應無比、筆瓢奈塵空。」とある。

○停棹 棹をさして舟を進めるのを、一時、止める。舟を停止させる。棹は、さを。舟を進める長い棒。唐、李白「江上寄元六林宗詩」に「停棹依林巒、驚猿相叫聒。」とあり、同、皇甫冉「送裴陟



婦「常州」詩に「夜雨須停棹、秋風暗入衣。」とあり、同、羅隱「過廢江寧縣」詩に「我亦有心無處說、等閒停棹似迷津。」とあり、同、吳融「平望蚊子二十六韻詩」に「舟人敢停棹、陸者亦疾趨。」とある。実際に棹を停めるのは、勿論、船頭である。或は、船頭が舟の乗客に対し、景色を見せるべく計らつたものか。

○湖心 湖水の中心部。唐、李白「陪侍郎叔遊洞庭醉後三首詩」其二に「船上齊橈樂、湖心泛月歸。」とあり、同、張祜「題杭州孤山寺詩」に「樓臺聳碧岑、一徑入湖心。」とある。

○筑波 筑波山。起句ですでに「波」の字を使つてゐるため、こゝでは「坡」の字を用ゐた。坡は、坂、堤の意。

○十年 竹堂は、この旅の年より足かけ十年前に当る天保元年、家郷を離れて仙臺の養賢堂に学んだ。時に十六歳。こゝは、それ以前の幼少期のことを思ひ出してゐるのであらう。

○夢隔 唐、皇甫冉「送陸鴻漸赴越詩」に「行隨新樹深、夢隔重江（一作山）遠。」とあり、同、張喬「宿齊山僧舍詩」に「一宿經窗臥白波、萬重歸夢隔煙蘿。」とあり、同、羅隱「酬章處士見寄詩」に「乱後幾回鄉夢隔、別來何處路行難。」とある。ひたすら夢に見るばかりで、実物とは、障り物に隔てられて、接することが出来ない、といふことであらう。

○釣魚 魚を釣る。『莊子』刻意に「就藪沢、処閒曠、釣魚閒処、無為而已矣、此江海之士、避世之人、閒暇者之所好也。」とある如く、釣魚は、古来、俗世を離れた隠者、高士を象徴する行為とせられる。こゝでは、それが更に作者の幼少期の追憶といふ、も一つの意味と重ね合はされ、世俗の「塵埃」に對比せられてゐる。

○潭 ふち(淵)。水の深い所。また、みぎは。水辺。こゝは、前者か。第三首に「荻潭」とあることからすれば、或は単に水辺の意で言ふものかとも思はれる。

○満肚 腹一杯。肚は、腹。

○塵埃 ちりほこり。世俗の穢れや煩はしさを言ふ。『楚辭』屈原「漁父辭」に「安能以皓皓之白、而蒙世俗之塵埃乎。」とある。

○不自堪 自分として耐へることが出来ない。自は、みづから。堪は、たへる。こゝらへる。我慢する。唐、宋之間「江南曲」に「妾住越城南、離居不自堪。」とあり、同、黃滔「旅懷詩」に「蕭颯聞風葉、驚時不自堪。」とある。

○要 是非とも云々したい。必ずや云々する心算である。『詩家推敲』に「要ハ求也、待也ト訓ス（○中略）欲ニ似テ重シ、とある。

○向 『詩家推敲』に「向ハ對スル也、趣ク也ト訓ス（○中略）詩ニハ多ク於ノ義ニ用ユ、とある。こゝも、於に同じく、場所を表すと解せられる。於との使ひ分けは、主に平仄の都合に由る。

○煙波 もやのたちこめた水面。唐、崔顥「黃鶴樓詩」に「日暮鄉関何處是、煙波江上使人愁。」とあり、同、李羣玉「登蒲澗寺後二巖詩」に「浩笑煙波裏、浮溟興甚長。」とあり、同、薛瑩「秋日湖上詩」に「落日五湖遊、煙波處處愁。」とある。

○洗將去 洗つて取り除く、洗ひすゝぎ去る、の意か。竹堂「村居三十律詩」其三十に「欲把生涯寫將去、語言猶恨未超凡。」とある。小川環樹『唐詩概説』（昭和三十三年九月 岩波書店）「唐詩の助字」には「將は動詞のあとにつき、そえ字となり、動作の現実化を表わす。俗語的用法。（○中略）「細合金釵 寄將し去る」（白、

長恨歌、古)のごとく、將のあとに去、來がつく場合もある。」とある。但し、本作品の場合も「動作の現実化」を表す、と言へるかは疑問である。

○孤篷 一艘の小舟。篷は、とまの意から、転じて、小舟。唐、皮日休「魯望以輪鉤相示緬懷高致因作三篇詩」其三に「孤篷半夜無餘事、應被嚴灘聒酒醒。」とある。

○聽雨 雨音をさく。唐、韋應物「送顔司議使蜀訪函書詩」に「山館夜聽雨、秋猿獨叫群。」とあり、同、戴叔倫「舟中見雨詩」に「今夜初聽雨、江南杜若青。」とあり、同、白居易「雨中招張司業宿詩」に「能來同宿否、聽雨對牀眠。」とある。

○泊 碇泊した舟の中で一夜を過す。

○湖南 湖水の南。特に洞庭湖の南。唐、劉長卿「吳中別嚴士元詩」に「日斜江上孤帆影、草綠湖南萬里情。」とある。こゝでは、勿論、霞ヶ浦の南。具体的には、牛堀近辺。

○短篷 短いとま。小舟の窓に掛つてゐる小さなとま。南宋、陳造「自適詩」に「渺漭湖天入短篷、心期祇許白鷗同。」(『大漢和』)とある。また、小舟自体を指すとも解せられる。

○也 また、『詩家推敲』に「也」ハ發語ノ辭ト訓ス、亦也、音近シテ義同シ、也ハ俗語ニ用ユ、亦ヨリハ輕シ、とある。

○何妨 構はない。支障がない。不妨に同じ。『詩家推敲』に「カマハヌ辭、又、ユルス辭ナリ、」とある。唐、賈島「寄胡遇詩」に「東門因送客、相訪也何妨。」とある。

○翻覺 寧ろ(一般的に豫想せられることゝは反對に)云々と感ぜられる。翻は、『詩家推敲』に「翻」ハ反也、覆也、(○中略)却

ト翻ト大概同様ニ用ユ、然トモ却ハ進退ヲ以テイフ、翻ハ背面ヲ以テイフ、とある。覺は、感ぜられる。唐、李白「宿白鷺洲寄楊江寧詩」に「徒令魂入夢、翻覺夜成秋。」とあり、同、熊孺登「野別留少微上人詩」に「若為相見還分散、翻覺浮雲亦不閒。」とある。

○閑眠 しづかな眠り。のどやかな睡眠。唐、李嘉祐「寄王舍人竹樓詩」に「南風不用蒲葵扇、紗帽閒眠對水鷗。」とあり、同、白居易「舟行詩」に「帆影日漸高、閒眠猶未起。」とあり、同、「南侍御以石相贈助成水声因以絕句謝之詩」に「泉石磷磷声似琴、閒眠靜聽洗塵心。」とある。

○一味 ひたすら。一途に。偏へに。専ら。北宋、黃庭堅「鄂州南樓詩」に「清風明月無人管、併作南樓一味涼。」とあり。南宋、陸游「次韻張長正字梅花詩」に「一味淒涼君勿歎、平生初不願春知。」とある。『隨園隨筆』には「一味、口頭語也、猶云一味、蓋專一之謂、王荆公詩、併作南來一味涼、是此意也。」(『大漢和』)とある。王荆公(安石)は、黃庭堅の誤か。

○泊處 自分が乗つてゐる舟が碇泊してゐる場所。自分が夜泊してゐる場所。

○何地是 何処であるのか。何という場所なのか。

○汀蘆 みぎはのあし。

○潭荻 水辺のをぎ。潭は、一般には、ふちの意であるが、こゝは水辺の意であらう。

○茫茫 ぼんやりとして明らかでないさま。結句は轉句の理由説明になつてゐる。

○三穗海 三保崎あたりの海。三保崎は駿河國有渡郡(現在の静岡

県静岡市清水区)にある、駿河湾に突き出た砂嘴。美保の松原。こゝよりの富士山の眺望は、古来、絶景とせられる。

○富嶽 富士山。

○快観 爽快な景観。心地よい眺め。

○奇観 珍しい景観。素晴らしい眺め。

○淡 あはい。あつさりしてゐる。淡泊。

○有味 味はひがある。

### 〔試訳〕

霞ヶ浦の舟の中にて 三首

#### (其一)

十里の彼方まで(見渡す限り) 広がる霞ヶ浦の湖面には、日の光がきらめき、たつぷりとたゞへられた水は波立つこともない。

船頭は私の乗る舟を漕ぎめぐらせて、それと気づかないうちに移動してしまつてゐる。

普段の生活ではこの快さ比べられるものは、恐らくないであらう。

(何と言つても) 舟棹を動かすのを止め(舟を停止させて) 広大な霞ヶ浦の真中で、筑波山を眺めるのだ。

#### (其二)

家郷を離れて以来、十年もの間、幼少の頃、釣糸を垂れた川の淵(水辺)のことは、夢に見るばかりで、実際には、魚釣りをして過ぐすやうな境遇とはかけ離れた日々を過して来た。

その為、腹の中一杯に溜まつた世俗のちりあくたは、自分自身で

も耐へ難い程である。

是非とも、この靄の立ちこめる波の上で、それを洗ひすぎ去つてしまひたいものである。

私は一艘の小舟の中で、雨の音に耳を傾けながら、霞ヶ浦の南の辺りに夜泊してゐる。

#### (其三)

小さな篷を垂らした舟の中で雨音に耳を傾けるのも、萬更、悪いものではない。

寧ろ、そのお蔭で、舟の中での眠りが、大変、静かでゆつたりしたものと感じられる。

今、舟が碇泊してゐるのは、一体、何といふ場所であらうか。

水辺には蘆や荻が生ひ茂つてをり、夜の世界はぼんやりとしてゐる。

#### (眉批)

枕山が言ふ。「霞ヶ浦から筑波山を望むのは、三保崎の海から富士山を望むのと同様に、爽快な景観であり、珍しくも素晴らしい景観である。他に比べものゝ有らう筈がない。」

良齋が言ふ。「あつさりとしてゐながら、味はひがある。」